

が胸水中に移行したことを証明した。(4)患側胸腔内に ^{99m}Tc -diphosphonate 15 mCi 注入後、経時的に採血し、さらに3 hr 後に骨スキャンを行なった。注射後10分の血液中に activity を認め、時間の経過と共に増量し、スキャン像でも骨に集積を認めた。

考案と結論：(1) ^{99m}Tc -diphosphonate 静注後、これが癌性胸水へ移行することは、Siegelら(1975)が報告している。この機転についてはなお不明であるが、本症の胸水貯留は滲出機転によるものであるので、 ^{99m}Tc -diphosphonate の胸水への移行も滲出によるものと考えられる。従って非癌性胸膜炎の場合も同様の結果が得られると考えられる。(2)胸水貯留側の胸膜腔内に ^{99m}Tc -diphosphonate を注入しても血液中へ移行し、骨スキャン像が得られるのは胸水貯留機転と吸収機転が同時に働いているためである。

6. ^{99m}Tc -diphosphonate の集積が見られた神経芽細胞腫の1例

河田 泰 中間 昌博
(自治医大・放)
須田 年生 末満 達憲
(同・小兒)

^{99m}Tc -リン酸化合物の骨外性病変への集積について多くの報告がみられ、神経芽細胞腫への集積についてもいくつか報告されている。

症例：7カ月の男児、生下時体重 3,350 gm、自然分娩。家族歴・既往歴に特記すべきことはない。

本年3月いつも汗をかいていると訴えて、当院小児科受診、4月3日に腹部腫瘤を指摘された。KUBで、腸管ガス像は外方へ圧排され、腹部中央に大きな腫瘤陰影がみられ、多数の点状の石灰化を伴っていた。IvPでは右腎は上外方へ圧排されて回転異常を生じ腎盂腎杯の拡張もみられた。左腎はほぼ正常であった。上記所見より神経芽細胞腫を疑い、 ^{99m}Tc -diphosphonate 3 mCi, i.v. による腹部シンチグラムを行なった。静注時の RI-angiogram で、腹部大動脈の左方への圧排がみら

れた。その4時間後の静的像で、腹部中央に大きな異常集積がみられ、右腎を上外方へ圧排していた。側面像では、異常集積像により膀胱が前下方へ圧排されていた。

シンチグラムの翌日大動脈造影を行ない、その翌日(4月28日)手術施行。後腹膜に、両側総腸骨動静脈と下大静脈・大動脈をまき込む小児頭大の腫瘍があり、部分切除に終わった。組織所見は神経芽細胞腫であった(なお、尿中 VMA は定性陰性であった)。

まとめ： ^{99m}Tc -リン酸化合物の神経芽細胞腫への集積機序ははっきりせず、X線石灰化の認められたものに集積した(Rosenfield 1974; Fitzer, 1974)とするものや、X線像はもちろん電顕レベルでも石灰化のみられないものにも集積した(Mc Cartney, 1976)との報告もみられる。

私たちは、X線石灰化の明らかなであった神経芽細胞腫の1例について報告した。

7. 幼児大腿 Ewing 肉腫の1例

—特に骨シンチ(^{67}Ga , ^{99m}Tc)を中心として—

一戸 兵部
(重疾研厚生病・外)
神 廉
(弘前大・放)

症例：4歳男児、左大腿に疼痛、腫脹、発熱を訴え、昭和52年7月発病。弘大整形外科で試験切除し、Ewing's sarcoma (PAS 陽性、嗜銀線維と無関係の小円形細胞肉腫)と診断加療中、8月弘大医学部水害で、放射線療法継続のため当院へ紹介された。

放射線療法 (linac X-Ray, 150 Rad \times 2 門, 15日間, total 4,500 Rad, Actinomycin D 150 μg 8日間併用使用)。化学療法 (Actinomycin D 0.45 mg/m² 5日間, Adriamycin 20 mg/m² 3日間 \times 2 vincristin 1.5 mg/m², Endoxan 1,200 mg/m²)。免疫療法 (丸山ワクチン使用, 患者の家族が特に希望)。外科的切除法は、家族が嫌うため行わず、X-P, 赤沈, 体重, PHA テスト, 貧血, 発熱, 骨シン